

陽気な学園天国

岡本 悠

とおる、の、小学校生活は、恋に溢れていた

山野先生が、体調不良で、担任をおりた

その頃、俺は、恋をしていた

隣のクラスのマドンナ、あけみ、に...

ある日、塾の帰り、早田に、遠回しに好きな子ができたと話した、バレナイように

そうしたら、早田は、学年名簿から探し出して、「この子だな？」と言ってきた

しぶしぶ降参、バレタ！

同じクラスの、倉川には、秘密にしてもらった

ある日、2人で、マドンナの教室をのぞくと、先生と、あけみ、だけがいる、こんな光景マジあり得ない、倉川と「おお！」「おお！」とおどけた

しばらくして、カズシにも打ち明けたが、内緒にしてと云ったとたん、すぐにウワサは広まった

そんな感じで、この恋は、終わってしまった、なんとなくやめてしまったのだ

進学塾では、ひかり、という、美形の女の子がいた

しかし、なにか、俺のことをはじめっ から毛嫌いしていた

だから、それという思い出もないのだが

綺麗だったという印象だけが残っている

6年生になった

新しい先生には、ベテランの石崎先生が、繋ぎ役として担当した

クラスでは、もみじ、の人气が高かった

もみじ、は、りさ、や、遠子と、徒党を組んでいた

もみじ、には、そんなに恋心はわかenかった

でも、なにか、意識する存在ではあった

もみじ、が、なんとなく、恋愛体質だったのもあるだろう

もみじ、は、カズシのことが好きだった

俺は、根っからの野球少年で、スポーツが好きだった

でも、勉強のほうは、からっきし、駄目だった

そんな最中、クラスの優子を突然好きになった

石崎先生の「誰がいいの？」

の問いかけに、無神経にも、とっさに

「優子さんがいいです」

と言うと

優子は、「えっ」と言い、意識した

石崎先生は「そういうことじゃな—い！」と共感して、笑った

俺も、優子への想いが、強くなった

休み時間は、優子連れだ6人くらいで、屋上に行くことが多かった

とりとめのない話をいろいろとした

印象に残っているのは

優子のお母さんが、早くから、自立させて、家から出すという話だった

これは、今の俺の生き方にも、結局、繋がってしまった

良きにしろ、悪きにしろ...

俺なりに幸せだった

ある朝の、運動の時間、

もみじ、が、校庭を走っていた

俺は、体育座りしながら見つめていたが

走っている、もみじ、と每周ごと

目が合う

もみじ、も、それに気づくが

知らないフリをして、周りの子とイチャツクが

また、目が合う

それを何度も繰り返した

そんな挙句

教室に戻ると

もみじ、が、「とおる、が、私のこと見てくるんだけど！」と喋っていた

担任の先生が、正式に、早先先生に変わった

俺は、その後も、休み時間はサッカーや、筋トレなどの、遊びで過ごしていた

そうしたら、1学年下の、5年生の2人の女の子たちが

俺を意識していた

キャッキヤ言っていた

そんな日が続いた

ソフトボール大会があり

クラスでドラフト会議がおこなわれた

俺は、監督権が与えられたので

1番手に、倉川を選んだあと、

なぜか、2番手に女子の、りさ、を指名した

これには、ざわめき、が、起きた

のちのち、もみじ、は、「りさ、のこと好きなんでしょ？」と、しつこく言ってきたが、そういうわけでもなかった

上手い言葉は見つからないが、直感で選んだだけだ

そして、好きな、優子は選ばなかった

晴れて、ソフトボール大会では、りさ、が活躍した

俺は、小学生なのに、りさ、にハグしてしまった

それを、りさ、が、どう意識したかは、いまだにわからなかったが

意識させた、というイメージだけは残っている

優子が、交換日記をつけようと言った

優子から始まったが、この頃は俺もこういうことに慣れていなかった

何を書いたか忘れたが

すぐに、おじゃん、になってしまった

5年生の2人の女の子たちが、屋上で待ち伏せしていた、ダッシュをしていた俺は、とっさに「邪魔だ！」と吠えてしまった、それが唯一、口を聴いたくらいかもしれない...

優子は、一緒に帰ろうと言った

俺は、親友の厚に見られたら恥ずかしいとって、おびえながら、一緒に帰った

ある時は、野球チームで、サードのポジションでノックを受けていたら、それを優子は見に来てくれた、でも、俺は知らないフリをした、恥ずかしいのだ

俺は、その頃、もみじ、を無視するようになっていた、理由はわからないが、優子があまり、もみじ、を好きではない、と聴いていたからだ

2学期が終わった、冬休み、俺は考えた、もみじ、とも仲良くしよう

3学期が始まった、

また、もみじ、とも話すようになったが

今度は、極端にも優子と距離を置くようになった、嫌いになったわけじゃないが、理由はよくわからなかった

それでも、優子は俺がいじめられて泣いていたら、仲裁に入ってくれて、助けてくれた

ある水泳大会の日、俺は、もう、みんなから嫌われているのかな？　なんて思いながら、リレーに参加した、俺が飛びこんで泳いでいると、もみじ、が、「とおる〜！　とおる〜！　とおる頑張れ〜！」と、叫んでいる、息継ぎの度に聴こえた

早先先生がキレタ日、優子はワゴンの角に顔をぶつけて倒れたが、泣かないで、起き上がった姿に見惚れた

そんな日は、もみじ、が、校内ルールを破って、帰り道に、駄菓子屋に寄って、お菓子を食べていた、俺を見ると、バツの悪そうな顔をしていた

一概に、友情を取るのか、恋愛を取るのか、という話でもなかった

優子と、もみじ、が、珍しく、2人で、教室で話しているのを見た時、なんという豪華な光景だ、と1人心の中で興奮した

バレンタインデーの日、もみじ、が、俺に、「5年生の2人から、手紙が来ているよ」と、普通のトーンで言った、それは、俺に届いたのかすら　憶えていない

優子が、ひやかした、「今日、とおる、が、着替えている時、ちんこ、を見た」と、俺は、



それがどうしたのか、と思った

別の時、俺は、優子が着替えている時、平らな胸を一瞬とらえた、それが、せめてもの復讐だったかもしれない

卒業式の日が来た

俺は、ある女子生徒に、「泣いてたね！」とからかうと、露骨に嫌な顔をされた

帰り、6年生を送るために、5年生がアーチを開いてくぐらせていた

忘れた頃に、5年生2人が、キャッキヤとはしゃぎながら、「とおるせんばい、さようなら～」と、言っていた、俺は軽くアクションした

帰り道は、やはり、親友の厚と帰った

すると、後ろから2人の女の子がつけてくる

振り返るとそこには、優子の姿があった

また歩くと

後ろから優子たちが

その繰り返しだった

そして、家に到着すると、俺は、厚に野球をしようと待ち合わせした

しばらくして、家を出る時、また優子たちはいたが、

それをまた無視してしまい、俺は出かけた

そして、それが最後に会った姿になった

俺は、20歳になり、成人式を休んだ、なんとなく行きたくなかったからだ

同窓会を開くことになり、優子に電話したが、「優子には行かない」と云った

そして、「なんで、成人式来なかったの？」と聴かれた、

そんな、会話を一通りして、結局、同窓会に優子は来なかった

とおる、は、40歳になった

久々に実家に帰った際、小学校の校舎を見つめた

夢の中で、優子が云った

「なんで、わたしを大切にしてくれなかったの？」

かげらう、が揺れていた

「完」